



全員で記念撮影

加藤宗哉幹事の挨拶で会はスタートした。毎年最初に挨拶に立たれる加賀乙彦会長、昨年参加してくださった遠藤先生のご子息の遠藤龍之介さん（フジテレビ社長）ともに残念ながら所用で欠席となったが、「皆さんにくれぐれもよろしくお伝えください」と、お2人の近況とメッセージが伝えられた。乾杯の発声は宮辺尚幹事。「昨年9月の周作クラブ総会の折、会員数の減少についてお伝えしたけれど、皆様が積極的に動いてくださった成果か、新入会員がまたぼつりぼつりと増えつつあり喜ばしい事です。引き続きどうぞよろしく願います。今年も楽しく過ごしましょう」という嬉しい報告と

もに一同乾杯となった。今回の会場がある聖心女子大学で、かつて遠藤先生は教鞭をとっていたことがある。ご家族に出身の方も多いようだ。そのように縁のある地で周作クラブの新しい年は始まった。この後はしばらく食事と歓談の時間となった。

食事が一段落したところで、昨年旅行委員に就任した福田祐泰さん（元東武トップツアラー）から、今年の「遠藤文学・原点の旅」についての説明があった。日程は5月17日から18日の1泊2日で、今回は短編「ユリアとよぶ女」・「怪奇小説集」の舞台になった静岡駿府城、熱海、網代などをバスで巡る予定だ。

続いてマイクの前に立った静岡の劇団スパックの西村藍さんからは、2月15日から3月1日までと3月7日に静岡芸術劇場で上演される遠藤先生の戯曲「メナム河の日本人」の案内があった。「メナム河の日本人」は1973年に新潮社から出版された戯曲で、タイ、アユタヤを舞台に、山田長政の生涯を描いたものだ。今年の周作クラブ原点の旅で訪れる駿府出身の山田長政と、一昨年の旅で訪れた大分県国東半島出身の神父、ペテロ岐部が主要人物というところも興味深い。

今回の新年会初参加者は新入会員を含めて4名となった。初めて読んだ遠藤作品の事など話していただいた。皆、

それぞれ遠藤ファンとしての歴史は長いようだ。滋賀県から参加の会員は、今まで遠藤周作の作品が好きだということ、プライベートな部分をさらけ出す様でなかなか周りの人に言えないでいたが、ここでは安心して話ができる。生前交流のあった方もいるのだから「ぐずぐずしている場合じゃない」と思い来ましたと語った。様々な形で、遠藤周作という人やその作品と出会った人たちが集う周作クラブの存在に、会場のどこかにいるに違いない遠藤先生も満足しているのではないだろうか。

恒例の大抽選会
「遠藤ファンなら泣いて喜ぶ豪華な景品は誰の手に」

新年会名物といえば抽選会だが、今年も河出書房新社をはじめ、各方面からのご厚意と、スタッフのアイデアで、様々な景品が揃えられた。

新年会報告

周作クラブ会報

(第78号)
2020年2月25日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

新年会報告	1, 2面
原点の旅のお知らせ	3面
連載	4, 5面
長崎文学館便り	6, 7面
周作クラブ長崎便り	8, 9面
研究会報告	10面
私が選ぶ遠藤周作 この作	11面
お知らせ欄	12面

今年も遠藤先生が会場に？ 会場も新たに、令和初となる新年会

1月25日（土）令和初となる周作クラブ新年会が開催された。今年の会場は、聖心女子大学グローバルセンター内にあるレストラン「ラ・メンサ・ジャスミン」。参加者は遠方からの会員を含め51名。晴天に恵まれ、明るい会場内は賑やかな笑い声にあふれた。



「メナム河の日本人」の資料が配られた